

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520004

研究課題名(和文)プラトンにおける「死後の神話」の哲学的意義の国際的研究

研究課題名(英文)International study in the philosophical significance of Platonic post mortem myths

研究代表者

荻原 理(Ogihara, Satoshi)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00344630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：G. Ferrari, S. Obdrzalekを招き、東北大学にてシンポジウム「プラトンの神話」を開催した。『国家』第10巻の「エルの神話」における「あの世での、これから生きる生の選択」についての英語論文を国際プラトン学会大会(慶應義塾)で発表し(審査有)、改訂版を電子ジャーナル誌PLATOに掲載した(査読有)。『法律』第10巻の、死後の魂の再配置の話についての日本語論文をギリシャ哲学セミナー大会(専修大学)で発表し、同セミナー『論集』に掲載した。『法律』のこの話が置かれた文脈(宗教法)についての英語論文をシンポジウム「自由と国家プラトンと古典的伝統」(オクスフォード大学)で発表した。

研究成果の概要(英文)：I held the symposium 'Platonic Myths' at Tohoku University, inviting Giovanni Ferrari (UC Berkeley, USA) and Susanne Obdrzalek (Claremont McKenna College, USA) in 2010. I read an English paper on the prenatal choice of life in Hades in the myth of Er in REPUBLIC X at Symposium Platonicum at Keio University, Japan in 2010 and published a revised version of it in PLATO (the electric journal of International Plato Society) in 2011. I read a Japanese paper on the god's transportation of souls in LAWS X at the conference of Seminar on Greek Philosophy at Senshu University, Japan in 2011 and published it in 2012. I read an English paper on the context in which this topic appears in the LAWS, i.e. the law against impiety, in the symposium 'Freedom and the State: Plato and the Classical Tradition' at Oxford University, UK in 2012.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：プラトン

1. 研究開始当初の背景

(1) プラトンの対話篇のいくつか(『ゴルギアス』、『パイドン』、『国家』、『パイドロス』、『ティマイオス』、『法律』)は、人の死後何が起こるのかについての神話を含む。だが、20世紀半ば以降、プラトン研究は哲学的議論の分析に焦点が当てられがちであり、神話は閑却されがちだった。だが20世紀末頃から、プラトンの対話篇を<同時に文学作品でもある哲学的テキスト>として読む姿勢が通常化ようになった。これはプラトンの神話を対話篇全体のなかに位置づけ、哲学的議論とも関連づけつつ考察する環境が整ったことを意味した。

(2) 「死後の神話」(特に『国家』第X巻の「エルの神話」)は、この生を生きている人間が置かれた状況の寓意的表現だとする解釈は有力で、研究代表者自身そのように解してきた。そこへ、Catalin Partenie, *Plato's Myths* という画期的な論文集(「エルの神話」についての Inwood 論文を含む)が2009年に刊行され(Cambridge UP)、プラトンの「死後の神話」を研究する新たな視座が提供された。

2. 研究の目的

プラトンの「死後の神話」が持つ哲学的意義を様々な角度から解明する。そのさい、神話の寓意的解釈の可能性を決して否定しないが、神話が文字通り人の死後に起こることを(も)語っているという作業仮説に立ち、そこで見てくることに注目する。

3. 研究の方法

(1) 各対話篇の固有性、各神話の対話篇全体における位置と機能に十分な注意を払う。

(2) 海外・国内での研究成果発表、内外の研究者との意見交換を行ないながら解明を進めていく。

4. 研究成果

(1) 先ず「死後の神話」一般に関し、プラトン諸対話篇に即しつつ、以下のような事情が解明・考察された。「人が死ぬとこうなる」という話については、これを文字通りに信じるのか、信じないのかが問題になり得る。幼少の頃からの刷り込み・教育や、「信じない者は罰する」という脅迫によって信じさせられる場合もある。だが、刷り込みも脅迫もなく、信じるか信じないかの選択が、これを聞く者、読む者に委ねられている場合のことを考えよう(対話篇の登場人物やわれわれ読者のように)。信じるとして、なぜ信じるのか。信じないとして、なぜ信じないのか。当人が持つ理由のことを考えよう(これは信念を生む原因と完全には重ならない)。真だと思われるから信じる、偽だと思われるから信じない、ということがあろう(その場合、な

ぜ真だと、偽だと思ふのかが問題になり得る)。しかし、信じる理由として、真だと思われるという以外の理由があるかもしれない、信じない理由として、偽だと思われるという以外の理由があるかもしれない。そう信じたいから、とか、そう信じたくないから、というような。「そう信じて、ある生き方をしなければならなくなるが、そういう生き方は面倒くさいので、信じたくない」と考えるのは、心理学的に可能だが不合理であろう。「そう信じていることが私をより立派な人間にするから、信じる」と考える場合、事情は複雑であり得る。そう考える人は、できるだけ立派に生きることへのコミットメントを、死後についての思いとして「投影」していると言えるかもしれない。しかしその場合、文字通りの意味で死後にどうなるかは、この人にとって実はさほど重要でない(例えば、同様の効果をもたらす話であれば、他のものでも構わない)ということになるかもしれない。しかし、「死後にどうなるかについての真実は、それを信じていることが、信じる者を立派な人間にするようなものであるはずだ」ということが前提されている(なぜ?)のなら、自分を立派な人間にするような話を信じる人が信じる理由は、「真だと思われるから」というそれを含むことになる。

(2) 『国家』第X巻の「エルの神話」で、あの世でわれわれが、これから生まれ変わって生きることになる生を、生の有限個のサンプルから自分で選ぶ、とされる箇所の字義的解釈を提示した(雑誌論文、学会発表)。以下の諸点を論じた。サンプルの中に、「生時に哲学的知識を獲得する」という意味での哲学者の生は含まれていないと考えるべきである(“哲学に従事する”という意味での哲学者の生は含まれていてよいが)。生まれてからどんな教育を受けるか、どのような国制の国家に生まれるかはサンプルで(ほとんど)特定されておらず、選ぶ者にわからないことが、魂以外の諸善については中庸を選ぶべきだという点を理解する鍵である。すでにハデスで僭主の生を選択していることは、生まれてから僭主になることを選ぶことと矛盾しない。その者のダイモンが、その者のこの生における諸選択の状況を適宜整えると考えればよい。ハデスで自分の生を選んだと考えることで、悲惨な状況に陥ったとき、神や運命を責めない態度が形成される。哲学してきた者は死にさいして、「徳こそ大事」との考えを堅く心に抱いて今度のハデスでの生を選択に備えるであろう。

(3) 『法律』第X巻の、魂の再配置の話の機能を考察し、以下の諸点を論じた(雑誌論文、学会発表)。悪徳な生に対する「罰」を語ることはマグネシア市民に悪しきことをさせないための脅しという意味を持つ(ただし、客人がこの再配置の話の文字通りに信

じているのなら、客人がこの話で脅しているということに必ずしもならない。より悪しくなりつつある魂がさらに悪しき場所に移されることがその魂を益するという視点はないようだ。ここで死後の裁きについては語られないが、再配置が「自動的」と言うのは誤解を招くという Stalley の指摘は正しい。死後の魂再配置のみならず生時のその話もすべりこませたのは、マグネシア市民のうちわかってくれる者も少しはいるかもしれないと睨んでのことかもしれない。第 X 巻のこの話が置かれた文脈である宗教政策について、これを「リベラル」に解そうとするのは無理であると論じた(学会発表)。また、そこでの「説得」の概念は通常のそれと異なるもので、客人らによる若き無神論者の説得はマグネシアでは起こり得ない、独自の想像の産物であると論じた(学会発表)。

(4) ジョヴァンニ・フェラーリ、スザヌ・オブドルジャレク両氏を東北大学に招き、国際シンポジウムを開催し、有益な議論がなされた(学会発表)。

(5) フェラーリ氏の『国家』解釈は、『国家』の描く議論が登場人物たちの対話としてある点、主要対話人物ソクラテスと著者プラトンの立場の相違に注目し大きな貢献をなした。研究代表者はここから多くを学び、研究に活かしつつ、氏の解釈のうち重要と思われる点を紹介した(雑誌論文)。

(6) プラトン『ピレボス』の「虚偽の快」第一議論を分析し、想像力についてのプラトンの把握を考察することを通じて、プラトンの神話的想像力の自己了解に照明を当てる基礎を提示した(著書)。

(7) トマス・アキナスにおけるプラトン主義的要素の考察を通じて、自体存在を指定する体系(プラトンの体系に代表される)の言語・語りの特徴が明らかになった(学会発表、雑誌論文)。

(8) プラトンの「無限」概念の考察を通じて、極限的なものに関するプラトンの思考の特徴が明らかになった(学会発表)。

(9) 本研究の成果は、同じ研究代表者による、平成 26 年度からの科研 基盤(C)「西洋古代の魂不滅説・滅亡説の論拠・含意に関する哲学的研究」における、プラトンの魂不滅説の研究の基礎として役立てられるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

荻原理、トマスの存在理解をめぐる上枝氏

の提題に寄せて(シンポジウム「中世におけるプラトニズム トマス・アキナスおよびイスラーム」提題)、中世思想研究、査読有、55、2013、107-117

Luc Brisson, Le travail de Simone Weil sur le Timée de Platon, Cahiers Simone Weil, 査読無、36、2013、243-257

荻原理、プラトン『法律』第 10 巻 903a-905d の、神による魂の再配置の話について、ギリシャ哲学セミナー論集、査読無、IX、2012、36-53、

http://greek-philosophy.org/ja/files/2012/04/2012_3.pdf

Giovanni Ferrari, Plato's writerly utopia, Proceedings of the Ninth Symposium Platonicum, 査読有、Akademia Verlag, 2012、131-140

荻原理、ジョヴァンニ・フェラーリの『ポリテイア』解釈の一端、理想、査読無、686 巻、2011、24-35

Satoshi Ogiwara, The Choice of Life in the Myth of Er, *Plato* (The Internet Journal of Plato Society), 査読有、11、2011、1-10、<http://gramata.univ-paris1.fr/Plato/article106.html>

Satoshi Ogiwara 他, The Choice of Life in the Myth of Er, *International Plato Society IX Symposium Platonicum: Plato's Politeia: Proceedings*, 査読有、2、2010、106-110

[学会発表](計 8 件)

Satoshi Ogiwara, Persuasion in Plato's *Laws*, Symposium: Plato and Rhetoric, 2014 年 4 月 27 日、慶應義塾日吉キャンパス

荻原理、プラトンらと無限(シンポジウム「無限概念の変遷 プラトンからクザーヌスまで」提題)、新プラトン主義協会大会、2013 年 9 月 22 日、慶應義塾日吉キャンパス

荻原理、トマスの存在理解をめぐる上枝氏の提題に寄せて(シンポジウム「中世におけるプラトニズム トマス・アキナスおよびイスラーム」提題)、日本中世哲学会大会、2012 年 11 月 11 日、文教大学湘南キャンパス

Satoshi Ogiwara, How free Magnesians are to speak and think about the gods - a remark on the city of Plato's *Laws*, Freedom and the State: Plato and the Classical Tradition, 2012 年 8 月 7 日、イギリス、オクスフォード大学

荻原理、プラトン『法律』第 10 巻 903a-905d の、神による魂の再配置の話について、ギリシャ哲学セミナー、2011 年 9 月 11 日、専修大学生田キャンパス

Giovanni Ferrari, The Freedom of Platonic Myth, シンポジウム「プラトンの神話」、2010 年 8 月 10 日、東北大学

Suzanne Obdrzalek, Philosophical Contemplation and Psychic Conflict in Plato's *Phaedrus*, シンポジウム「プラト

ンの神話』、2010年8月10日、東北大学
Satoshi Ogihara, The Choice of Life in
the Myth of Er, International Plato
Society, 2010年8月6日、慶應義塾三田キ
ャンパス

〔図書〕(計4件)

Noburu Notomi 他, The Platonic Art of
Philosophy, Cambridge UP, 2013, 51-69
Satoshi Ogihara 他、Richard Patterson,
Vassilis Karamanis, Arnold Hermann 編、
*Presocratics and Plato: Festschrift at
Delphi in Honor of Charles Kahn*,
Parmenides Publishing, 2012, 291-309
Giovanni Ferrari 他、*Plato and Myth:
Studies on the Use and Status of Platonic
Myths*, Brill, 2012, 67-86

Noburu Notomi 他、Inner Life and Soul:
Psyche in Plato, Academia Verlag, 2011,
185-193

神崎繁、納富信留他、西洋哲学史 「あ
る」の衝撃からはじまる、講談社、2011、35-90、

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻原 理 (OGIHARA, Satoshi)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00344630

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

神崎 繁 (KANZAKI, Shigeru)

専修大学・文学研究科・教授
研究者番号：20153205

納富 信留 (NOTOMI, Noburu)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：50294848

Giovanni Ferrari
University of California, Berkeley,
Classics, Professor

Luc Brisson
CNRS, Centre Jean Pépin, chercheur
émérite